



大学共同利用機関法人

# 人間文化研究機構

National Institutes for the Humanities

要覧 2007





大学共同利用機関法人

人間文化研究機構

National Institutes for the Humanities

## 要覧 2007

目次

機構長あいさつ	1
設立の経緯と目的	2
組織図	3
人間文化研究総合推進事業	4
人間文化研究総合推進検討委員会	4
連携研究	5
連携展示	7
研究資源の共有化事業	8
講演会・シンポジウム	9
知的財産	10
地域研究推進事業	11
各機関の活動	12
国立歴史民俗博物館	12
国文学研究資料館	16
国際日本文化研究センター	20
総合地球環境学研究所	24
国立民族学博物館	28
資料	32
委員会一覧	32
経営協議会／教育研究評議会／人間文化研究総合推進検討委員会／評価委員会／機構会議／ 企画連携室会議／連携研究委員会／研究資源共有化検討委員会／地域研究推進委員会	
データ一覧	34
予算・決算／職員数／共同研究の件数および共同研究者数／研究者の受け入れ・派遣／ 外部資金の受け入れ／データベース一覧／大学院教育	

# ごあいさつ



大学共同利用機関法人・人間文化研究機構は、平成16年(2004)に設立された研究組織で、国立歴史民俗博物館、国文学研究資料館、国際日本文化研究センター、総合地球環境学研究所および国立民族学博物館という5つの研究機関によって構成されています。本機構は、これらの諸機関が、学問的伝統の枠を超えて連合し、自然環境をも視野に入れた人間文化の総合的研究拠点を形成し、そこから新しいパラダイムを創出することによって、自然と人間の歴史的営為が、地球規模で複雑に絡み合って生じる21世紀のさまざまな難問に立ち向かおうとしています。

機構は、こうした目標を達成するための事業のひとつとして、これら5つの研究機関を中核とし、国内外の大学・研究機関の研究者の参画を得て実施する「連携研究」を推進してまいります。また、機構を構成する5機関が所蔵する膨大な研究資料の利用を促進するため、これらの諸資料をデジタル化し、これをネット上の共通のプラットフォームで利用し、同時に広く情報提供する「研究資源共有化」を本格化させております。さらに、わが国の新たな地域研究推進の一翼を担うため、地域研究推進センターを設置いたしました。

機構の研究者が、それぞれの個性を保ちつつ、みずからの専門分野を超えたさまざまな研究プロジェクトに積極的に参加することによって、本機構を真に人間文化の総合的学術研究の世界的拠点として発展させるべく、今後とも努力を続ける所存であります。

平成19年7月

大学共同利用機関法人  
人間文化研究機構

機構長 石井米雄

# 設立の経緯と目的

大学共同利用機関は、学術研究の拠点として、大規模な施設設備や膨大な資料・情報などを全国の大学等の多数の研究者の利用に供するとともに、それを通じて効果的な共同研究を実施する研究機関です。

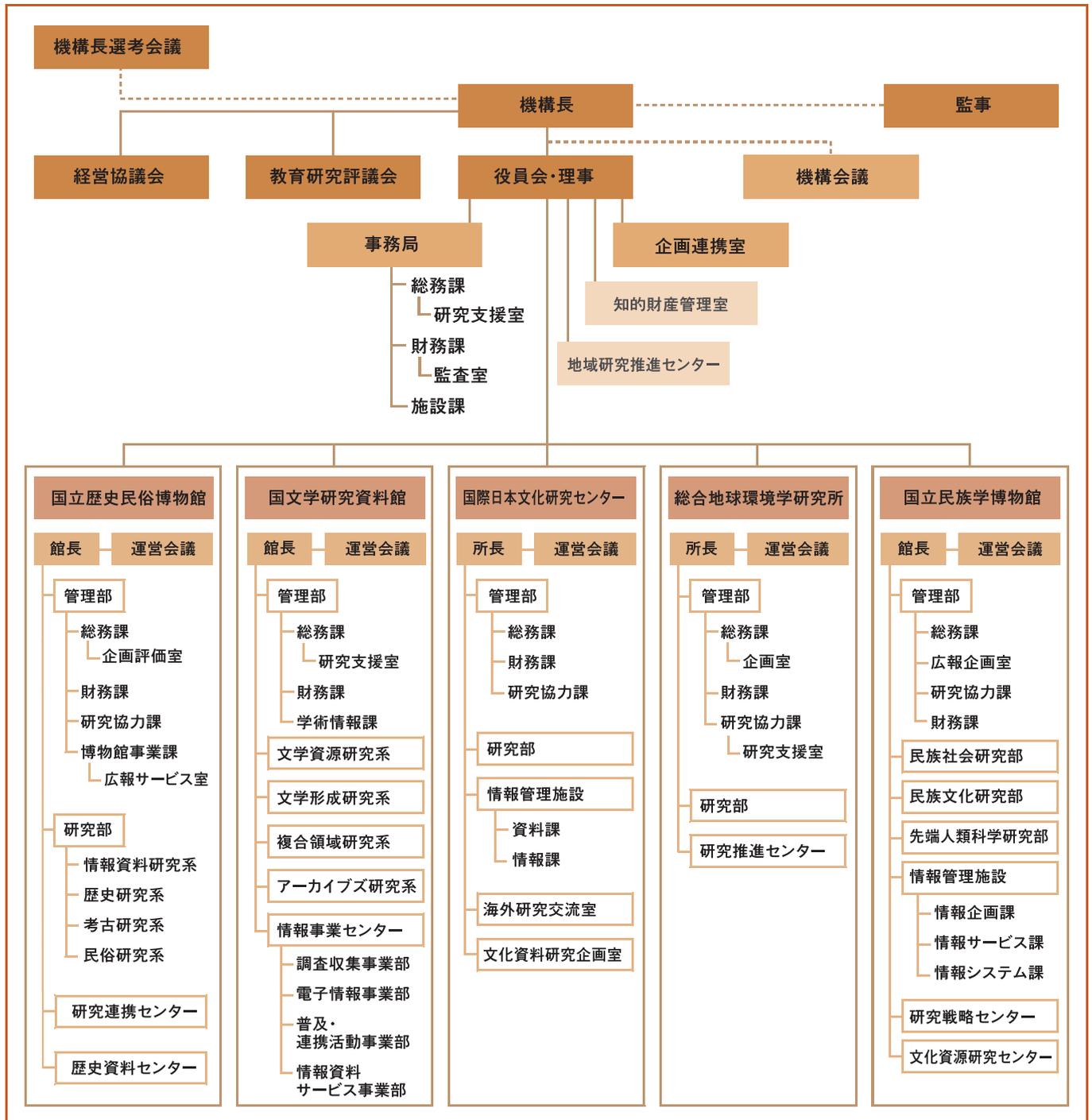
大学共同利用機関の法人化にあたっては、既存の16の研究機関が、人間文化研究機構、自然科学研究機構、高エネルギー加速器研究機構、情報・システム研究機構の4つの機構に再編されましたが、大学共同利用機関としての役割である共同利用および外部に開かれた運営は機構ごとに充分確保できるよう整備に努めました。

大学共同利用機関法人・人間文化研究機構は、人間文化に関わる5つの大学共同利用機関（国立歴史民俗博物館、国文学研究資料館、国際日本文化研究センター、総合地球環境学研究所、国立民族学博物館）によって構成され、平成16年（2004）4月に設立されました。

21世紀を迎えた今日、自然と人間の歴史的営為が地球規模で複雑に絡み合った難問が山積しています。それらに対応するために、自然環境をも視野に入れた人間文化に関する総合的研究をめざして、5つの研究機関が旧来の学問の枠を超えて連合し、新しいパラダイムを創出する研究拠点を形成するものです。本機構は、膨大な文化資料にもとづく実証的研究、人文・社会科学の総合化をめざす理論的研究など、時間、空間の広がりを見野に入れた文化に関わる基礎的研究および自然科学との連携も含めた研究領域の開拓に努め、また、課題解決型の研究にも取り組み、文化の総合的学術研究の世界的拠点となることを目標とするものです。

機構を構成する各研究機関とその研究者は、それぞれの個性を保ちつつも、その専門分野を超えた研究プロジェクトに積極的に参加することによって、機構の創造的発展を図ります。本機構には、博物館、資料館の文化資料のナショナルセンターとしての機能を持つ研究機関が参画しています。機構を構成する各研究機関がすでに蓄積し、これからも収集に努める「資料」と「情報」にもとづき、機構内外の研究者の総力を結集して調査研究を実施し、機構全体としてその研究成果を展示、刊行物、さらにはあらゆる情報機能などを活用することにより広く国内外に発信し、学術文化の進展に寄与することをめざすものです。

# 組織図



## 機構役員

石井米雄 機構長  
 長野泰彦 理事  
 朝岡康二 理事  
 大崎 仁 理事(非常勤)  
 五味文彦 理事(非常勤)  
 松澤真子 監事(非常勤)  
 新保博之 監事(非常勤)

## 各機関の長

平川 南 国立歴史民俗博物館長  
 伊井春樹 国文学研究資料館長  
 片倉もとこ 国際日本文化研究センター所長  
 立本成文 総合地球環境学研究所長  
 松園万亀雄 国立民族学博物館長

## 企画連携室

長野泰彦 理事  
 篠原 徹 国立歴史民俗博物館・副館長  
 鈴木 淳 国文学研究資料館・副館長  
 合庭 惇 国際日本文化研究センター・情報管理施設長  
 秋道智彌 総合地球環境学研究所・副所長  
 田村克己 国立民族学博物館・副館長

## 事務局

辻田政昭 事務局長  
 高橋裕俊 総務課長  
 長塚正明 財務課長  
 篠原周史 施設課長

# 人間文化研究総合推進事業

21世紀における人類にとってもっとも重要で緊急の課題は、地球における人類の存続と、世界における人間の共生です。この難問を解く鍵は「文化」にあるとの発想に基づき、人間文化研究機構は人間文化研究の新たな領域を、従来の枠組みを超えて創出し、先端的・国際的な研究を展開するため、次の事業を実施しています。

- 人間文化研究総合推進検討委員会
- 人間文化研究資源の共有化推進
- 人間文化研究機構内外機関の連携研究などの推進
- 国際連携協力
- 情報発信 など

人間文化研究総合推進事業は、法人化2年目(平成17年度)から措置された特別教育研究経費により実施されており、着実に成果を挙げています。

## 人間文化研究総合推進検討委員会

人間文化に関する新たな研究推進の方向、推進すべき領域、課題およびそのための研究体制の構築などを検討します。機構長、理事全員、機関を代表する者5名、外部有識者9名で組織されています。人間文化研究の新たな領域創出のための基礎的な調査と議論を重ねてきましたが、より効率的な検討を行うため、平成19年度から3つの検討部会を設置します。その検討内容は以下のとおりです。

1. 「大学共同利用機関における博物館の役割」検討部会  
本機構には2つの博物館を有する機関があり、また、研究成果を展示するスペースを持つ機関が2つあります。大学共同利用機関という研究機関が博物館を持つ意義と、研究機関が行う資料収集・整理・研究・展示に関する特性を、一般公衆への供覧・情報提供という博物館が必然的に持つ性格をも合わせて再定義し、大学共同利用機関としての新たな研究の方向を示すことをめざしています。また、平成17年度から試行的に行ってきた「連携展示」のあり方に関する提言も行います。
2. 「法人2期における研究連携」検討部会  
平成17年度に開始された連携研究は、機構内外の研究者の参加を得て、順調に推移していますが、平成21年度に終了します。その成果と研究の仕組みをさらに発展・展開させるとともに、わが国の人文科学全体を見通して、その統合的な切り口と人文科学プロパーの新しい観点を検討することを目的とします。また、それを実現するための戦略と体制を、外部資金獲得を視野に入れて、検討します。
3. 「国際連携協力」検討部会  
機構を構成する5つの研究機関はそれぞれのミッションに従い、従前から独自の国際連携協力ネットワークを構築してきました。それらの情報を共有するとともに、新たな人間文化研究推進のための相互補完的かつ戦略的な方策を検討します。また、このために必要な現地調査と適切な外国の機関からの招聘を行い、効果的な連携協力関係を構築します。

## 連携研究

「21世紀における新しい人間文化研究の創出」を目的とし、機構内の複数の機関における研究を適切に組み合わせ、かつ、高度化させるため、「連携研究」を推進しています。この研究は機構内外の研究者に開かれたものです。

機構を構成する5つの大学共同利用機関はそれぞれ分野における研究のナショナルセンターであり、かつ、個別の大学では扱えない大規模な研究資料群を重点的に収集・整理・調査・研究し、それを全国の研究者の利用に供しています。各機関が培ってきた研究基盤と成果を有機的に結びつけ、さらに高次の研究に発展させるために企画されたのが連携研究です。より具体的に言い換えるなら、機構の連携研究とは、機構を構成する機関にすでに蓄積のある、あるいは実績を期待できる研究を、機関を超えてつなぎ、それを相補的に組み合わせることによって新しい視座を開拓し、かつ、高度化させることを目的とする協業的研究です。この連携研究を機構外の研究者にもオープンにし、研究の実をあげるとともに、本機構の共同利用性をいっそう高めることも重要な目的です。これらの研究の成果は、出版や展示はもとより、電子媒体を通じて広く世界に開示し、人間文化研究の発展に資するものです。

このような研究を適切、かつ、効率的に行うため、連携研究委員会を設置し、連携研究のあり方の検討と厳正な審査を行っています。この委員会には外部有識者5名が含まれており、この外部委員の過半の出席がないと、委員会を開くことができません。

連携研究には2つの柱があり、1つは《日本とユーラシアの交流に関する総合的研究》、もう1つは《文化資源の高度活用》です。

《日本とユーラシアの交流に関する総合的研究》は、日本とユーラシア、とりわけアジアとの交流およびその歴史的な様相について、各機関の研究の蓄積を結合させ、機構外の研究者との協業のもとに、総合的に研究を行うことを通じて、人間文化の新しい研究を創成していきます。全体は5年度にわたる計画で、「ユーラシアと日本：交流と表象」（研究代表者：久留島浩）、「湿潤アジアにおける『人と水』の統合的研究」（研究代表者：秋道智彌）、「文化の往還」（研究代表者：谷川恵一）の3つの研究課題を本格的に始動させ、シンポジウムや国際研究集会などを開催するとともに、その一部の成果出版を行っています。

### ■ユーラシアと日本：交流と表象(国立歴史民俗博物館：久留島浩)

- ・国際シンポジウム「ユーラシアと日本：交流と表象 境界の形成と認識——移動という視点」/国立歴史民俗博物館(19.3.3～3.4)
  - ・国際研究集会「ユーラシアと日本：交流と表象 天津南開大学歴史研究院・日本研究院との研究協議会」(19.3.14～3.18)
  - ・国際シンポジウム「中国における少数民族の文化資源の形状と現状——広西の事例から」/国立民族学博物館(19.2.24)
  - ・国際研究集会「オーストリア都市の歴史的調査とシンポジウム」/ウィーン抵抗史料研究所(18.10.30～11.3)
  - ・国際ワークショップ「19世紀中東・バルカンへの新しいアプローチ——オスマン帝国における近代国家の形成」/千葉大学(19.1.13～1.14)
  - ・国際シンポジウム/国立民族学博物館(19.3.3～3.4)
  - ・国際研究集会/台湾南台科技大学(18.12.21～12.24)
  - ・国際研究集会「韓国・全羅南道光州市などで5～6世紀の古墳の埋葬施設・出土品の調査とミニシンポジウム」/湘南文化財研究院(18.12.21～12.23)
- 刊行物——
- ・「絵解きサミット」報告書
  - ・「シンポジウム ユーラシアと日本 交流と表象の現状と課題」報告書
  - ・「ウィーンシンポジウム 帝国と民族アイデンティティ——東アジアとオーストリアをめぐる」報告書

■ 湿潤アジアにおける「人と水」の統合的研究(総合地球環境学研究所：秋道智彌)

- ・シンポジウム「世界遺産・人・水」/ 総合地球環境学研究所 (18.11.19)
- ・シンポジウム「水と文明」/ 一橋記念講堂 (19.2.24)  
——刊行物——
- ・研究連絡誌「人と水」(特集：水と身体) 1号
- ・研究連絡誌「人と水」(特集：水と社会) 2号
- ・「水と世界遺産——景観、環境、暮らしをめぐる」(小学館)

■ 文化の往還(国文学研究資料館：谷川恵一)

- ・国際研究集会「『満州』学の再編——新たな共同研究の可能性を探る」/ 国際日本文化研究センター (19.3.27~3.29)
- ・国際研究集会「境界を越える日本文学研究」/ コレージュ・ド・フランス日本学高等研究所 (19.2.16)

《文化資源の高度活用》は、機構内の機関が所蔵する文化資源を機構内外の機関や研究者との連携のもとに研究し、資源の共同利用を高度に推進することを目的としています。《日本とユーラシアの交流に関する総合的研究》から6か月遅れて、「アイヌ文化の図像表象に関する比較研究『夷酋列像図』とマンローコレクションのデジタルコンテンツ化の試み」をはじめとする6件の研究課題が予備研究としてスタートし、現在8件の本研究が進行中です。

各機関はそれぞれの文化資源・資料について整理・調査研究・情報提供を行ってきた実績があります。その集積を踏まえ、機構内外の機関・研究者との連携のもとに研究を行い、資源の共同利用を高度に推進することによって、より高いレベルの研究成果をめざします。

■ 武士関係資料の総合化——比較史および異文化表象の素材として(国立歴史民俗博物館：小島道裕)

■ 中世近世の禁裏の蔵書と古典学の研究——高松宮家伝来禁裏本を中心として(国立歴史民俗博物館：吉岡眞之)

- 刊行物——
- ・「中世近世の禁裏の蔵書と古典学の研究——高松宮家伝来禁裏

本を中心として 研究調査報告 1」

■ 「日本の実業史博物館」資料の高度活用(国文学研究資料館：青木睦)

- 刊行物——
- ・「復活日本実業史博物館 連携研究2006年度報告」(DVD版)

■ GISを基盤とする考古・歴史民俗・環境情報の高度連携研究(国際日本文化研究センター：宇野隆夫)

- 刊行物——
- ・「GISを基盤とする考古・歴史民俗・環境情報の高度連携研究 2006年度成果報告書」

■ 東アジア近代史資料の再構築——旧「日中歴史センター」所蔵図書を利用して(国際日本文化研究センター：合庭惇)

- ・国際研究集会「米国の対外情報政策とCIA映画」/ 国際日本文化研究センター (19.3.10)

■ アイヌ文化の図像表象に関する比較研究——「夷酋列像図」とマンローコレクションのデジタルコンテンツ化の試み(国立民族学博物館：佐々木史郎)

■ 有形文化資源の共同利用を推進するための資料管理基盤形成(国立民族学博物館：園田直子)

■ 日本コロムビア外地録音のディスコグラフィ的研究(国立民族学博物館：福岡正太)

- ・国際セミナー「音楽に聴く近代東アジア」/ 国立民族学博物館 (19.3.1~3.3)

## 連携展示

人間文化研究機構は、膨大な研究資料・情報を収集、調査研究、そして提供することを共同利用の形態・機能のひとつに掲げています。国立歴史民俗博物館、国立民族学博物館は大規模な展示室を有し、さらに加えて、国文学研究資料館は現在は小規模な展示室ですが、立川移転後は重要文化財などの指定品も展示できるよう、本格的な展示室を設計準備中です。

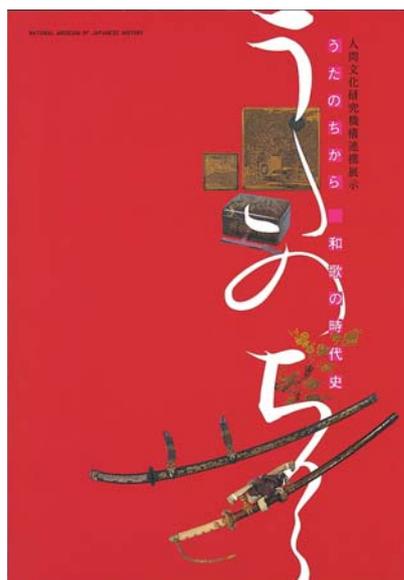
共同研究をはじめとする種々の研究成果は、刊行物、情報発信、講演、フォーラムなどに加えて、可視化し、迅速に研究者に展示公開するとともに、社会との連携として広く国民一般に供覧することで共同利用機関としての実をあげていきます。

機構連携事業として、研究資源の共有化事業を推進する一方、各機関の共同研究などの成果を展示公開できる点は、本機構が他機関や大学に比して、きわめて特徴的な機能を有しているといえます。

さらに、その展示形態として、連携研究の成果を複数機関が「連携展示」することも期待されます。平成17年度は古今集、新古今集をめぐる「うたのちから」が国立歴史民俗博物館と国文学研究資料館の連携のもとに行われました。この成果に基づいて、「うたのちから」が出版されました。

平成18年度は連携展示のあり方を検討し、今後の連携展示の方針を定めました。その結果、平成19年度は5月28日から連携研究の成果を展示で示す「幻の博物館の『紙』」を国文学研究資料館で開催し、国立歴史民俗博物館に巡回する予定です。

今後は連携研究の成果や、共同研究による展示、巡回展示など、展示のあり方をさまざまに模索・工夫しながら連携展示を行ってゆきます。



「うたのちから」展の出版物  
上、国立歴史民俗博物館と下、国文学研究資料館

## 研究資源の共有化事業

人間文化研究機構を構成する諸機関においては、かねて人間文化に関する多様な研究データベースを構築・発信に注力してきました。それらは膨大な研究情報となり新しい研究環境を生み出して、それぞれの研究分野における研究の進展に大いに寄与してきました。しかし、それらのデータベースはそれぞれ固有の専門的な利用を想定して作られており、専門的な研究において必要と考えられる検索に対応したものですから、新しい観点からいくつかのデータベースを統合検索しようとする場合に、必ずしも期待にそった結果が得られるとは限りません。

そこで人間文化研究機構は、これまでのデータベース構築の成果を受け継いでさらなる有効利用を図るために、研究データベースの一元的・網羅的な利用を可能にして、個別の専門的な利用に止まらない幅広い学際的なアプローチを支援する研究環境の構築をめざしてきました。そのためには、各機関の垣根を取り払った横断検索を可能にするシステムを構築して、機関を越えて必要な情報を自由に引き出し統合できる仕組みを実現する必要があります。こうして、平成18年度は各機関が構築した既存のデータベースに新たにメタデータを添付することによって、それらをどこからでも自由に一元的に検索できるシステムを導入しました。

また同時に、人間文化の研究に不可欠な時間(年代・時代など)と空間(地理的位置・地名など)を用いた検索システムの開発・導入も行い、さらには研究者の必要に応じた多様な研究形態に則したデータベースの加工が容易になるアプリケーションの導入も行いました。

平成19年度は、これらのシステムの十分な試行を行い、また、必要な機能を追加・拡充したうえで、平成20年度には一般に広く公開します。

このようなシステムの構築は、連携研究・共同研究などの活性化に大いに寄与すると思われませんが、それは同時に専門的研究者に止まらない多方面からの活発な利用も期待されています。

さらに、このシステムを発展させて、機構の外の機関(大学付属研究所・その他の研究機関)が所持する各種のデータベースについても、機構内のデータベースと同様に利用できるようにすることが計画されており、それが実現すると研究環境は飛躍的に充実するものと思われます。そのことも勘案して、ここで用いた人間文化研究機構のメタデータ規則を、平成18年度末に公開しました。



研究資源共有化システム概念図

## 講演会・シンポジウム

人間文化研究機構では、国立歴史民俗博物館、国文学研究資料館、国際日本文化研究センター、総合地球環境学研究所、国立民族学博物館という専門を異にする5つの研究機関が結ばれたメリットを生かし、より新しく、より幅の広い人文科学の創出をめざすとともに、さまざまな研究活動を展開しています。これによって得られた学問的成果を広く知っていただくために、定期的に公開講演会・シンポジウムを開催します。



第5回シンポジウムポスター



第6回シンポジウムポスター

### 人間文化研究機構設立記念公開講演会・シンポジウム

「今なぜ、人間文化か」

平成16年9月25日(土)

一橋記念講堂

### 人間文化研究機構第2回公開講演会・シンポジウム

「歩く人文学——人文学と社会の新しい関係」

平成17年6月25日(土)

大阪国際会議場

### 人間文化研究機構第3回公開講演会・シンポジウム

「人が創った植物たち」

平成17年10月6日(木)

有楽町朝日ホール

### 人間文化研究機構第4回公開講演会・シンポジウム

「人はなぜ花を愛でるのか？」

平成18年5月27日(土)

国立京都国際会館

### 人間文化研究機構第5回公開講演会・シンポジウム

「人は、どんな手紙を書いたか」

平成18年9月30日(土)

一橋記念講堂

### 人間文化研究機構第6回講演会・シンポジウム

「世界に広がる日本のポップカルチャー——マンガ・アニメを中心として」

平成19年6月2日(土)

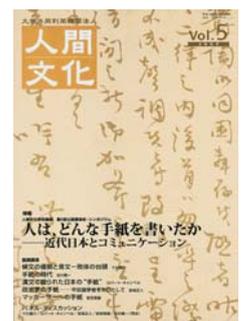
有楽町朝日ホール



広報誌『人間文化』Vol.3



広報誌『人間文化』Vol.4

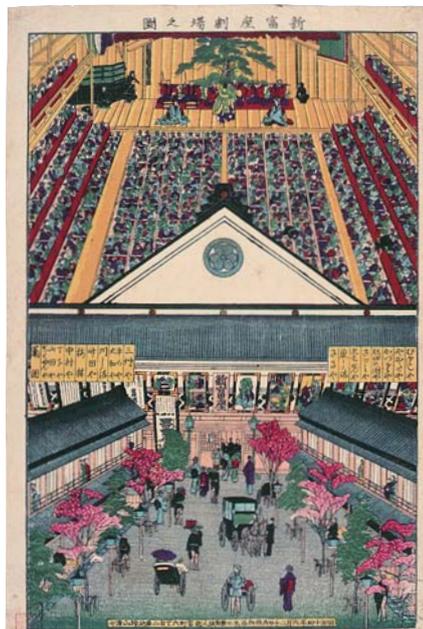


広報誌『人間文化』Vol.5

## 知的財産

人間文化研究機構は、文部科学省が行う「大学知的財産本部整備事業」に他の大学共同利用機関法人とともに参加して、機構の知的財産の創出・取得・活用に戦略的に取り組んでいます。また、機構を構成する各機関は、研究・教育の過程において創出・獲得された知的財産を管理・運用するだけでなく、積極的に社会に還元するための体制を整えてきました。機構に設けられた知的財産管理室は、このような機関の体制整備を推進するとともに、知的財産について、広く研究者の理解が及ぶように周知策を講じています。

また、人間文化研究機構を構成する機関は、数多くの研究支援のためのデータベースを構築して、インターネットなどを通じて有償・無償で公開しており、所蔵資料・写真の熟覧・貸与、著作物の使用許諾なども積極的に進めています。それにとまって求められる知的財産の一層の管理体制の整備にも努力してきました。また、イノベーションジャパン2006(東京国際フォーラム・9月)にも4機関の知的財産本部整備事業の一環として参加しました。



新富座劇場の図

## 平成18年度セミナー等の実施事業

「人間文化研究機構知的財産セミナー」を開催しました。

第1回「著作権をはじめとするさまざまな知的財産関係の具体的事例、疑問等に関する質疑応答」

開催：平成19年2月20日

場所：総合地球環境学研究所

講師：藤川義人(弁護士・弁理士、淀屋橋・山上合同法律事務所)

第2回「情報共有化時代の著作権」

開催：平成19年3月7日

場所：人間文化研究機構

講師：野口裕子(弁護士、クリエイティブコモンズ・ジャパン事務局長／森・濱田・松本法律事務所)

## 平成19年度セミナー等の実施事業(予定)

平成18年度と同様に知的財産管理室を活用して、知的財産の一層の効率的な管理・運用に努めるとともに「人間文化研究機構知的財産セミナー」を開催して啓蒙に努めます。

# 地域研究推進事業

人間文化研究機構は、わが国にとって学術的、社会的に重要な意義を有する地域の文化、社会を、総合的に理解、解明するため、関係大学・機関と協力して、平成18年度から、「地域研究推進事業」を開始しました。

## 事業の実施方式

本事業は、関係大学・機関と研究拠点を共同設置し、拠点間のネットワークを構築して、研究を推進する新しい方式の研究事業です。

対象地域は、学識経験者で構成する「地域研究推進委員会」において、「イスラーム地域」と「現代中国」を選定しました。まず「イスラーム地域」について、研究基本計画と研究計画を策定して研究体制を整備し、すでに平成18年度から研究を進めています。

「現代中国」については、平成19年度から研究を開始します。

## イスラーム地域研究の推進

イスラーム地域研究は、以下のとおり関係大学・機関と共同で研究拠点を設置し、早稲田大学に設置した「現代イスラーム地域研究センター」を中心にネットワークを構築して、研究を進めています。

- 早稲田大学イスラーム地域研究所「現代イスラーム地域研究センター」
  - ・センター長……佐藤次高(早稲田大学イスラーム地域研究所長、文学学術院教授)
  - ・中心テーマ……「イスラームの知と文明」
- 東京大学大学院人文社会系研究科附属次世代人文学開発センター「イスラーム地域研究部門」
  - ・部門の長……小松久男(東京大学大学院人文社会系研究科教授、次世代人文学開発センター流動教員)
  - ・中心テーマ……「イスラームの思想と政治：比較と連関」
- 上智大学アジア文化研究所「イスラーム地域研究拠点」
  - ・拠点代表……私市正年(上智大学外国語学部教授)
  - ・中心テーマ……「イスラームの社会と文化」
- 京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科「附属イスラーム地域研究センター」

- ・センター長……小杉泰(京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科教授)
- ・中心テーマ……「イスラーム世界の国際組織」
- 財団法人東洋文庫研究部「イスラーム地域研究資料室」
  - ・資料室の長……三浦徹(お茶の水女子大学理事、東洋文庫研究員)
  - ・中心テーマ……「イスラーム地域研究史資料の収集・利用の促進とイスラーム史資料学の開拓」

## 現代地域研究の推進

現代中国地域研究は、以下のとおり関係大学・機関と共同で研究拠点を設置し、早稲田大学に設置した「現代中国研究所」を中心にネットワークを構築して、研究を進めます。

- 早稲田大学アジア研究機構「現代中国研究所」
  - ・所長……毛里和子(早稲田大学政治経済学術院教授)
  - ・中心テーマ……「中国の発展の持続可能性」
- 京都大学人文科学研究所「附属現代中国研究センター」
  - ・センター長……森時彦(京都大学人文科学研究所教授)
  - ・中心テーマ……「人文学の視点から見た現代中国の深層構造の分析」
- 慶應義塾大学東アジア研究所「現代中国研究センター」
  - ・センター長……国分良成(慶應義塾大学東アジア研究所長、法学部教授)
  - ・中心テーマ……「中国の政治的ガバナンス」
- 東京大学社会科学研究所「現代中国研究拠点」
  - ・運営委員長……田嶋俊雄(東京大学社会科学研究所教授)
  - ・中心テーマ……「中国経済の成長と安定」
- 人間文化研究機構・総合地球環境学研究所「中国環境問題研究拠点」
  - ・リーダー……中尾正義(総合地球環境学研究所教授)
  - ・中心テーマ……「中国の社会開発と環境保全」
- 財団法人東洋文庫「現代中国研究資料室」
  - ・室長……高田幸男(明治大学文学部准教授、東洋文庫研究員)
  - ・中心テーマ……「現代中国研究資料の収集・利用の促進と現代中国資料研究の推進」



国立歴史民俗博物館全景

## 概要

国立歴史民俗博物館(歴博)は、大学における学術研究の発展および資料の公開等、一般公衆に対する教育活動の推進に資するための大学共同利用機関として、昭和56年(1981)に設置されました。

歴博は、歴史・考古・民俗および情報資料の4研究系による学際的・総合的な協業に基づく研究を進めてきました。また、創設以来収集してきた膨大な歴史資料・情報と先端的科学機器を十分に活用し、広義の歴史学と自然科学の融合を図り、新たな日本の歴史と文化像を築くことをめざしています。博物館という形態を持つ大学共同利用機関としての特徴を最大限に活かして、資源・研究・展示の3要素を有機的に連鎖させた「博物館型研究統合」という新たな本館独自の研究スタイルを推進し、さらに研究の共有や公開を積極的に進めています。

研究成果については、『国立歴史民俗博物館研究報告』として刊行するとともに、企画展示をはじめ、「歴博講演会」「歴博フォーラム」さらには情報データベースなどを通して広く公開しています。

以上のような学術資料・情報の収集、整理、保存、調査研究そして提供(展示、出版、情報データベースなど)の一連の機能は、歴博が大学をはじめとする研究者のた

めの共同利用機関として、果たすべき重要な使命であると考えています。

その機能のうちでも展示は、歴博にとってきわめて意義ある事業のひとつです。開館以来25年を経た今、現状の総合展示は研究成果の反映、国際化および一般市民の知的需要への対応が不足しているとの批判が利用者から寄せられています。このような急激に変化する現代社会の要請に応えるためには、最新の研究成果を反映した総合展示の見直しが不可欠であり、新たに総合展示の全面的な再構築を実現する必要があります。平成19年度末から一新した総合展示の一部を順次公開する予定です。

## 研究

歴博では、全国の大学、研究所等の研究者の参画を得て、専門を異にする複数の研究者が共通の研究課題のもとにプロジェクトを組織し、共同研究(基幹研究・基盤研究・個別共同研究・連携研究)を実施しています。

基幹研究は、大きな研究課題のもとに学際的研究をめざす課題を設定したものであり、基盤研究は、収蔵資料の高度情報化や、新しい歴史研究の方法論的基盤を作るための課題を設定しています。この2つを「共同研究」の核とすれば、個別共同研究は、歴史学・考古学・民俗学並びに関連諸科学に固有な課題や、今後発展しうる萌芽的課題を設定し、共同研究全体を実りあるものとする役割を担っています。

それぞれの平成19年度における研究テーマは次のとおりです。

### 基幹研究

- ・ 生業・権力と知の体系に関する歴史的研究
- ・ 20世紀に関する総合的研究Ⅱ
- ・ 列島における生活誌の総合的研究

### 基盤研究

- ・ 科学的資料分析研究

- ・ 総合的年代研究
- ・ 高度歴史情報化研究
- ・ 博物館学的研究

### 個別共同研究

- ・ マ口塚古墳出土品を中心とした古墳時代中期武器武器の研究
- ・ 日本歴史における水田環境の存在意義に関する総合的研究
- ・ 人文・自然景観の開発・保全と文化資源化に関する研究
- ・ 身体と人格をめぐる言説と実践
- ・ 東アジア先史時代の定住化過程の研究

### 連携研究

- ・ 交流と文化変容に関する史的研究



研究会風景

## 共同利用

### 1. 資料収集等

歴博では、実物資料・複製資料・音響映像資料およびこれに関連する資料を計画的・継続的に収集しており、平成19年5月現在、213,633点(うち国宝5点、重要文化財84点、重要美術品27点)収集しています。また、蔵書冊数は282,613冊となっています。

### 2. 情報提供

#### 研究報告書の刊行

共同研究などの成果は『国立歴史民俗博物館研究報告』として刊行するとともに、研究情報を網羅した『国立歴史民俗博物館年報』、さらに歴史系総合誌『歴博』『展示図録』『資料目録』などを刊行しています。

#### データベースの公開

収蔵資料を広く公開し、研究利用に資することを目的とした館蔵資料データベース(9本)と諸分野の文献目録や共同研究の成果を集成したデータベース(21本)、記録類の全文データベース(8本)を主として研究者に提供しています。

#### 資料閲覧

研究者を対象とした資料閲覧(熟覧)の他に、平成16年7月から近世・近代10文書の実物またはマイクロフィルムと館蔵51資料のマイクロフィルム紙焼製本(部分)の即日閲覧を実施しています。



資料調査風景

### 3. 展示

#### 総合展示

歴博の総合展示は、生活史に重点を置いて構成し、5つ

の展示室に分かれています。第1展示室から第3展示室は、原始・古代から中世をへて近世に至る歴史を時代順に配置し、第4展示室では民俗世界を、第5展示室では近現代のテーマを配置しています。これらのテーマは、それぞれ館内外の研究者によるプロジェクト研究を基礎にしています。また最新の研究動向を踏まえ、その研究成果を展示に反映する総合展示のリニューアルを進めており、第3展示室「近世」が平成20年3月18日(火)、リニューアルオープンする予定です。

#### 企画展示

共同研究プロジェクトの成果を公表する方法のひとつとして、企画展示があり、平成19年度は4回の開催を予定しています（「西のみやこ 東のみやこ——描かれた中・近世都市」展は開催済みです）。

- ・西のみやこ 東のみやこ——描かれた中・近世都市  
平成19年3月27日(火)～5月6日(日)
- ・弥生はいつから!?——年代研究の最前線  
平成19年7月3日(火)～9月2日(日)
- ・長岡京遷都——桓武と激動の時代  
平成19年10月10日(水)～12月2日(日)
- ・新収資料の公開／日本の建築  
平成20年1月16日(水)～2月11日(月)

なお、平成7年に開設された「くらしの植物苑」では、生活文化を支えてきた植物を系統的に植栽し、素材となった植物を博物館の展示資料と関連づけて深く理解できるようにしています。



フロアスタッフ研修風景



「歴史のなかの鉄炮伝来——種子島から戊辰戦争まで」展



「西のみやこ 東のみやこ——描かれた中・近世都市」展



くらしの植物苑風景

## 社会連携

歴博では共同研究などの成果を展示という形だけでなく、さまざまな普及活動を通じて社会に還元しています。

### 1. 歴博フォーラム・講演会の開催

研究成果を広く一般に公開するための「歴博フォーラム」と「歴博講演会」を開催しています。



歴博探検(調査室)風景

### 2. れきはくプロムナード

平成16年9月に、歴博における最新の研究成果の速報および地域社会との連携並びに人間文化研究機構の紹介などを目的とした「れきはくプロムナード」を開設し、各種の展示を行っています。

### 3. 専門職員研修事業などの実施

平成5年度から、歴史民俗系資料館の活動の充実に資するため、文化庁と共催で全国の歴史民俗系博物館・資料館の専門職員を対象に「歴史民俗資料館等専門職員研修会」を開催しています。

### 4. 歴博の紹介

全国生涯学習フェスティバルや国立少年自然の家などでの歴博紹介を積極的に実施しています。



「佐倉連隊にみる戦争の時代」展に伴う歴博探検風景

### 5. 研究交流

海外の大学・研究機関・博物館と学術交流をめざし、平成18年度までに7件の交流協定を締結しています。また、国際研究集会を開催するとともに、外国の研究者や国内の大学などの研究者に研究の機会を提供するため、外国人研究員、外来研究員を受け入れています。

国内の活動としては、各地の研究者との研究交流を深めるための研究集会を開催しています。

## 大学院教育

### 大学院教育

平成11年度から総合研究大学院大学文化科学研究科日本歴史研究専攻が置かれています。個別授業・基礎演習・集中講義の3つの形態の授業を行い、博士論文の作成指導と研究者としての能力の育成を図り、歴史学・民俗学・考古学・分析科学などの多分野にわたる研究者による複数教員の指導と基盤機関に所蔵されている実物資料の活用などを通し、広い視野を持った創造性豊かな研究者の育成を行っています(平成19年5月1日現在、在学生31名)。

### 特別共同利用研究員

大学院教育の協力の一環として、特別共同利用研究員制度を平成9年度から設けており、大学の要請に応じ歴史学・考古学・民俗学およびそれに関連する分野を専攻する大学院学生を受け入れ、必要な指導を行っています(平成18年度実績6名)。



国文学研究資料館 本館正面入口

## 概要

国文学研究資料館は、文献資料の調査研究、収集、整理および保存等を目的として、昭和47年(1972)に設置されました。以来、大学等の研究者の協力を得ながら、国内外に所在する日本文学およびその周辺の資料について調査し、マイクロフィルム等による収集を行い、保存に努めています。また、集積した資料や情報は、閲覧、複写サービス、インターネット等によるサービスを通じ、広く研究者および一般利用者に提供しています。

同時に、調査、収集した膨大な書誌情報を活用し、文学研究を基盤、総合および応用にわたって体系的、総合的に展開させるべく基幹研究、プロジェクト研究等を企画し、推進しています。それらは、大学等の研究者と連携し、多面的な共同研究として実施しています。また、海外の研究機関、研究者との交流にも積極的に取り組んでいます。

その他、展示、講演会、ワークショップ等を通じて、日本文学およびその周辺の文化資源の活用を図り、社会との連携を図っています。

## 研究

国文学研究資料館では4つの研究系でプロジェクト研究を共同研究として行うほか、平成18年度から新たに全館的に取り組む基幹研究を開始しました。

### 基幹研究

創立以来当館が培ってきた、日本文学に関する原本資料の調査収集の成果を基盤として継承し、体系的な調査収集計画に基づいて行う総合研究で、以下の4研究課題を開始しました。

- ・ 王朝文学の流布と継承
- ・ 19世紀における出版と流通
- ・ 「源氏物語」再生のための原典資料研究
- ・ 家伝書としての近世兵書資料の基礎的研究

### 文学資源研究系

書籍形態の文学資源に関し、原本調査に基づいた総合研究を行います。書誌情報の集積と分析、書籍の形態の内容の考察、目録の作成、解題の作成などの基礎研究を通じ、文学資源が有する日本文学としての資料的特質を明らかにします。

- ・ 日本古典籍特定コレクションの目録化の研究
- ・ 和刻本(五山版・近世初期刊本)の研究
- ・ 学芸書としての中世類題集の研究
- ・ 近世後期小説の様式的把握のための基礎研究

### 文学形成研究系

日本文学の個々の作品や作品群を対象に、作品形成という観点を軸として、本文の調査によって作品の成立、表現、享受等に至るさまざまな問題を総合的に研究し、日本文学の作品的特質を明らかにします。

- ・ 平安文学における場面生成研究
- ・ 古典形成の基盤としての中世資料の研究
- ・ 近世文芸の表現技法〈見立て・やつし〉の総合研究

## 複合領域研究系

文学作品群の多角的な分析を行うことによって学際的な研究領域の開拓を目指すとともに、そうした研究を一体となって支える、文化資源情報の電子化および共有化に関する研究を行います。

- ・開化期戯作の社会史研究
- ・文化情報資源の共有化システムに関する研究

## アーカイブズ研究系

古文書から電子記録まで多様に存在するアーカイブズ資源に関する総合的研究を行い、日本のアーカイブズの特質の解明及びその保存、活用のための技法・理論を確立することを目的とし、さらにアーカイブズ情報を社会化するためのシステム研究を推進します。

- ・経営と文化に関するアーカイブズ研究
- ・東アジアを中心としたアーカイブズ資源研究
- ・アーカイブズ情報の資源化とネットワークの研究

このほか、公募による共同研究「江戸時代中期文人大名に見る学芸と思想に関する総合的研究」および「川瀬一馬氏旧蔵古典籍写真資料の調査と研究」を実施します。



古典籍のさまざま



明治合巻「高橋阿伝夜刃譚 初編」から



「擬五行尽之内 生田の森の貝金  
梶原源太」から



奈良絵本「小おとこ」から

## 共同利用

### 資料閲覧サービス

収集し整理した資料は閲覧室において来館利用者への閲覧・複写サービス等を行っており、図書館間の相互利用制度により、遠隔地の利用者へも資料の複写等のサービスを行っています。

### 公開データベース等

「国文学論文目録データベース」「日本古典籍総合目録」を始め、計21のデータベースによる学術情報の提供を行っています。さらに、「リプリント日本近代文学」のオンデマンド出版も平成17年度から開始しました。

### 展示

#### 通常展示

- ・和書のさまざま——書誌学入門

平成19年4月16日(月)～5月18日(金)

- ・新収資料展

平成19年10月15日(月)～11月16日(金)

#### 人間文化研究機構連携展示・春季特別展

- ・幻の博物館の「紙」——日本実業史博物館旧蔵コレクション展

平成19年5月28日(月)～6月15日(金)

渋沢敬三が構想した「日本実業史博物館」のために収集した資料のうち、「紙・製紙」に関するものを中心に展示するものです。この展示の開催期間中に、同じテーマによるシンポジウムを開催します。



春季特別展「幻の博物館の「紙」」ポスター

## 社会連携

### 国際日本文学研究集会

国内外の日本文学研究者の交流を深め、日本文学研究の発展を図るため、毎年11月に開催しており、平成19年度は11月15日(木)、16日(金)に「手紙と日記——対話する私／私との対話」というテーマで開催します。



国際日本文学研究集会

### 日本古典籍講習会

国内外で日本の古典籍を扱っている図書館や文庫の司書を対象とし、古典籍の基礎知識・取り扱い等に関する講習会を開催します。講師は、当館教員および司書並び

に国立国会図書館司書等で、平成19年度は、平成20年1月16日(水)～18日(金)に国立国会図書館で開催します。

### アーカイブズ・カレッジ

記録史料の保存と利用サービス等の業務を担う専門職員(いわゆるアーキビスト)の養成のため、長期コースと短期コースを開催します。講師は当館教員等で、長期コースは7月～9月の間の計8週間、国文学研究資料館で開催し、平成19年度の短期コースは山口県文書館において11月5日(月)～16日(金)に開催を予定しています。



アーカイブズ・カレッジ

### 子ども見学デー

文部科学省の働きかけにより実施している「子ども見学デー」の一環として、平成19年度は8月下旬に開催を予定しています。平成18年度は、「昔の遊びと昔の本」「江戸時代の勉強法」と題した講義を行いました。



子ども見学デー

### シンポジウム

・ 幻の博物館の「紙」

平成19年6月9日(土)開催。

国文学研究資料館アーカイブズ研究系プロジェクト「経営と文化に関するアーカイブズ研究」と人間文化研究機構総合推進事業連携研究「日本実業史博物館資料の高度活用」の研究成果です。

コーディネーター：青木 睦

パネラー：

増田勝彦「和紙にみる昭和の技術」

稲葉政満「海外のジャパニーズ——WASHI」

近藤雅樹「アチック・ミュージアムと紙」

金山正子「科学の目で見る紙資料」



シンポジウム

## 大学院教育

国文学研究資料館には、総合研究大学院大学の文化科学研究科(日本文学研究専攻)が設置されています。総合研究大学院大学は、大学共同利用機関等の人材と研究環境を基盤として、教育・研究を行っています。日本文学研究専攻では、従来の日本文学研究を、文化科学の視点から総合的に捉え直す立場に立って、多面的な指導をしています。

また、特別共同利用研究員制度により、大学の要請に応じ大学院生を受け入れ、研究指導に協力しています。



国際日本文化研究センター外観

## 概要

国際日本文化研究センター(日文研)は、日本文化に関する国際的・学際的な総合研究と世界の日本研究者に対する研究協力・支援を行うことを目的として、昭和62年(1987)に設置されました。以来、日本文化の独自性の研究のみならず、諸外国との文化比較や文化交流の視点をも重視し、日本文化に関する多様な研究を、国内外から参加するさまざまな専門領域の共同研究員による分野横断的な研究を展開しています。

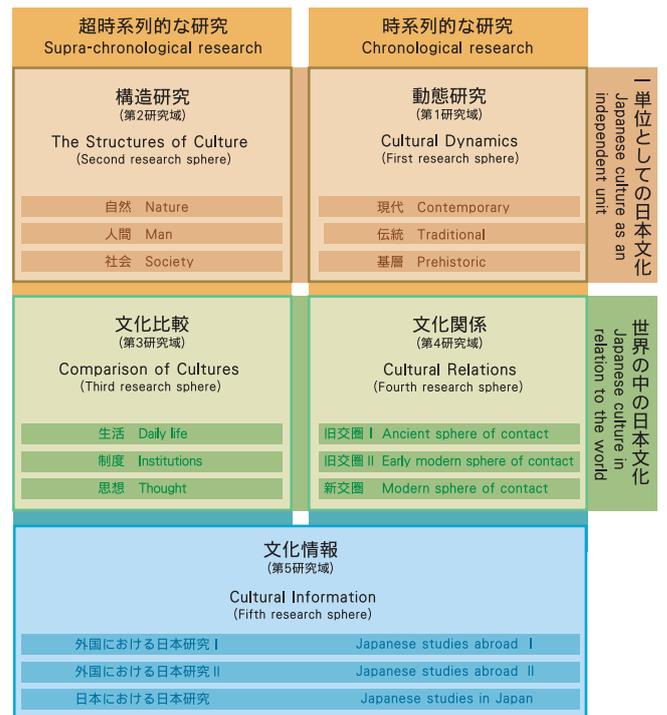
研究部門制を採用していない日文研では、共同研究を研究域・研究軸という枠組みのもとに位置づけ、特定の分野に偏らない、バランスのとれた共同研究を推進しています。その研究成果は、和文・英文による図書・学術雑誌、講演会、シンポジウムなどさまざまな形で、国内のみならず広く海外に提供しています。

研究協力としては、世界各地の日本文化の研究者・研究機関に、研究情報を発信するとともに、地域の実情に応じて日文研のスタッフを派遣して研究会を開催するなど、多面的な研究協力活動を行っています。

また、総合研究大学院大学文化科学研究科国際日本研究専攻・博士課程では、次代の日本研究者養成を行っています。ここでは、留学生も受け入れています。

## 研究

日文研における研究活動は、研究域・研究軸という枠組みのもとに行われています。この枠組みの原則は、日本文化の全体像を把握するための視座として、まず研究域を設け、次にそれらを分節して研究軸を設けたものであり、研究軸は研究域の示す視座の中で、いくつかの方向を特定するものです。



## 共同研究

日文研がもっとも力を入れているのは、共同研究方式の日本文化の研究です。日本文化を研究するためには、関係する個別専門分野ごとの成果が着実に積み重ねられなければなりません。併せて専門分野の枠組みを越えて、研究者が相互に知見を高めあう場が必要になります。こうした共同研究の場は、総体として日本文化理解の促進に大きな役割を果たすものと期待されます。また、共同研究では、日本と異なる知的伝統に立つ海外の研究者と

の交流をも重視しています。さらに、国際化時代といわれる今日、日本文化研究の多角的な国際化を図ることで、時代の要請に答えようとするものです。

このように、日文研における共同研究は、単なる研究成果の交流にとどまるものではなく、専門分野および知的伝統を異にする研究者たちが研究過程を共有し合うことによって生みだされる創造性に基づく成果をめざしています。

平成19年度は、15の課題による共同研究が行われています。



共同研究会

## 研究協力

日文研では、日本文化に関する国際的・学際的な総合研究を行い、世界に開かれた国際的なセンターとしての責務を果たすため、諸外国から外国人研究者を受け入れています(平成19年5月31日現在、累計世界39か国、402名)。これら外国人研究者と日文研の教員や国内研究員との親密な学問的交流は、世界の日本研究促進の基盤となっています。

また日文研では、日本研究を行っている研究者を対象に研究協力活動を展開しています。この活動は、個々の研究者の研究交流を目的とする国際研究協力と、日文研が蓄積してきた研究情報の提供に大別することができます。

具体的には、「フォーラム」「セミナー」「レクチャー」「シンポジウム」のような、研究会形式の研究交流を行う場

の提供や、個人的な研究上の協力として研究相談などを実施しています。

国内開催の研究会は以下のとおりです。

- ・「日文研フォーラム」は、来日中の外国人研究者による研究発表と交流の場の提供を目的に、毎月開催しています。テーマは日本文化に関連したものを1回で完結する形をとっています。



日文研フォーラム

- ・「セミナー」「レクチャー」「シンポジウム」は、日文研の教員が専門領域のテーマを設定して開催するものと、来日中の外国人研究者と日文研の教員が共同・協力して学際的なテーマを設定して開催し研究者との交流をも目的としているセミナーです。
- ・Nichibunken Evening Seminar は、外国人研究者の研究発表と国際交流を兼ねた英語によるセミナーです。
- ・「世界の日本研究シンポジウム」は、海外研究交流室が中心となり、来日中の外国人研究者による研究発表と交流の場の提供を目的に、年1回開催しています。
- ・日本在住外国人研究者による研究発表と交流の場の提供を目的としたシンポジウムをこれまで年1回開催してきましたが、平成19年度からは、内容を一新すべく現在、海外研究交流室を中心に検討を行っています。また海外においても、以下のとおり研究会を開催しています。

## 海外シンポジウム

平成7年度から海外においても研究活動・研究協力活

動を行うため、年1回海外シンポジウムを実施しています。

平成18年度は、カイロ大学(エジプト)との共催で「日本研究カイロ会議」を実施しました。

### 海外における日本研究会

平成11年度から、海外研究交流室を中心に教員を年数回海外に派遣し、訪問した地域の日本研究者と協力して、現地の研究動向に即したテーマで小規模な研究会を開催しています。併せて、研究相談等支援業務を行っています。このことにより、日文研の設置目的である国際研究協力活動をより積極的かつ効果的に行うものです。同時に優秀な若手研究者の発掘にもつながり、また、海外の日本研究の生の情報を得る貴重な機会になっています。

平成18年度は、ミラノ大学とレッツェ大学(イタリア)にて開催しました。

### 海外研究交流シンポジウム

平成18年度から、海外の日本研究者とのネットワークをさらに強化し、恒常的でより親密な研究者交流をめざすため、海外研究交流室が中心となり海外研究交流シンポジウムを実施しています。

初年度は韓国学中央研究院、ソウル大学校日本研究所、および東西大学校(韓国)において、またアルガス・ヨーロッパ日本学研究所との共催でコルマル(フランス)においてシンポジウムを開催しました。

### 国際研究集会

日本の文化、社会に対する世界各国の関心はますます高まり、それにともなって、研究者の問題意識、研究方法の多様化もきわめて著しいものがあります。このような状況に対応するため、主として日文研での共同研究をテーマに、昭和63年から国際研究集会を開催し、日本研究発展のための国際的な討論の場を設けています。

また、各研究集会の期間中には、普及活動の一環として公開講演会を実施しています。



国際研究集会

## 共同利用

### 図書館

中央に東屋風のサービスカウンターを配置した円形図書館は、3層の吹き抜け構造になっており、落ち着いた利用空間を提供しています。ここは、日本研究に必要な各種資料を幅広く収集し、研究者の利用に供するとともに、さまざまな情報提供に努めています。平成7年に増設した資料館は、固定書架・電動集密書架のほか、貴重図書室、地図資料室、研究用個室、マイクロ資料室等が配置されています。また、自由接架方式を採用していますので、利用者は40万冊の図書を自由に手に取って閲覧することができます。

なお、個々の資料の配架場所・貸出状況は各フロアー設置の検索用端末機で調べることができます。

### 資料の収集

日文研における資料収集方針は、外国語で書かれた日本研究図書および訳書の網羅的収集、日本研究に必要な基本図書・雑誌の収集、日本研究に関する文献目録等の網羅的収集、その他、幕末明治期のガラス写真・色彩写真、古地図、ビデオ・CDなどの映像音響資料、科学史関連資料、医学史関連資料、日中関係資料等も積極的に収集しております。

## 資料の利用

教職員・学生等は所蔵する資料を自由に利用することができます。また、外部の方も学術研究・調査を目的に事前申請のうえ閲覧することができます。これらは、インターネット上で検索でき、図書館間相互利用制度により文献複写や現物貸借サービスを申し込むことができます。

## データベース等の公開

日文研が収集した日本研究資料、日文研教員の研究成果をはじめ、日文研以外の機関所有の日本研究資料等のデータベース化を推進し、40本のデータベースをWebで公開しています。また、検索エンジンも備えていることから、世界中の幅広い日本研究の推進に役立てられています。

Webでの公開は資料のデータベースばかりでなく、学術講演会等のインターネット放送を整備しており、平成9年度以降の120本分の講演記録をインターネット放送として公開しています。講演会当日はリアルタイムで視聴可能です。

## 社会連携

「社会に開かれた研究機関」として、研究活動・研究協力活動により得られた成果を広く社会に還元するため、以下のような普及活動を行っています。

### 1. 学術講演会

年3～4回、日文研講堂において、日文研の教員・外国人研究員による研究成果の発表と日本研究の普及を目的として学術講演会を開催しています。

### 2. 東京講演会

毎年6月に、東京において日本研究の普及を目的に、総合テーマ「日本文化を考える」と題して日文研の教員・外国人研究員による講演会を開催しています。

### 3. 公開講演会

日文研で開催される国際研究集会・国際シンポジウムの期間中に、普及活動・社会貢献の一環として同時通訳による公開講演会を開催しています。

### 4. 一般公開

毎年11月頃に、教員の案内による図書館・セミナー室・教員研究室・共同研究室等を公開し日頃の活動状況を紹介したり、日文研講堂において日文研の教員・外国人研究員による講演会を開催しています。当日は展示コーナーを設けて研究資料データベースの紹介や日文研所蔵の貴重図書・写真、前年度の教員の出版物等を展示しています。



学術講演会

## 大学院教育

大学共同利用機関を基盤機関とする国立大学法人総合研究大学院大学の文化科学研究科(博士課程後期)の中に本センターを基盤とする「国際日本研究専攻」が設置されています。同専攻には国外からの留学生を多く含む院生が学んでおり、国際的視野から学際的、総合的な日本研究を推進する教育と研究が行われています。



総合地球環境学研究所全景

## 概要

私たち人間は今日、地球温暖化、生物多様性の喪失、水資源の涸渇など多くの地球環境問題に直面しています。平成13年(2001)に設置された総合地球環境学研究所(地球研)では、基本認識として、これらの原因が人間の文化の問題であることに着目し、その解決には従来の科学技術的方法や技術手段の拡大だけでは対処しきれず、自然・技術系と人文・社会系との総合的な取り組みが必要と考えています。

こうした趣旨のもと、地球研では「地球環境学に関する総合的研究」を行うことを目的としています。地球環境問題の本質把握に不可欠な「人間と自然との相互作用環」の解明や、問題の克服につながる「未来可能性」を実現する道筋の探求などに関する研究に取り組み、また、これらの研究の成果を広く発信することによって、地球環境問題の根本的な解決に資する学問基盤を形成することをめざしています。

## 研究

地球研はプロジェクト制です。研究部のスタッフは原則、どれかのプロジェクトに属しており、ほぼ全員が任



井戸水を汲む子供たち(マニラ)



民俗調査からのアプローチ

期つきです。現在、終了プロジェクト(CR)が5本、本研究プロジェクト(FR)が14本、本研究移行見込みのプレリサーチ(PR)が3本、予備研究(FS)が6本です。このほか研究プロジェクトのシーズとなるインキュベーション研究(IS)が3本あります。

地球研の研究プロジェクトは、所内外から公募されたもののうち採択されたISを1年ほど実施し、この期間中にブレインストーミングを行って「地球研らしい」プロジェクトの骨格を作り上げます。地球研らしい研究とは、取り上げる問題を、現象の観測やモニタリングにとどまらず、「人間と自然との相互作用環」として理解し、問題の解決に資する道筋を示すことをめざす研究のことです。

ISが終わると全所員を対象にしたセミナーを開き、所員の意見を反映させた審査で優れたものだけをFSに移行させます。

FSでは、フィージビリティ(実行可能性)を1年かけて検証します。毎年12月に行われる「プロジェクト研究発表会」の場で、FSは全所員対象に研究成果の発表を行います。「プロジェクト研究発表会」は全所員に出席が義務づけられた地球研の全体会議です。発表と質疑応答の結果、地球研のプロジェクトとしてふさわしいと認められると、所長はそのFSを研究プロジェクト評価委員会に付託し、評価委員会で厳正な審査ののち、はじめてPRに進むことができます。

評価委員会の構成員は全員が所外で、しかもその半数が外国の研究機関に籍をおいています。評価委員会での発表は英語で行われます。FR開始2年後に評価委員会で適切な指導を受け、5年後に最終審査を受けてプロジェクトが終了する仕組みになっています。



プロジェクト発表会

## 共同利用

### 1. 頭脳の共同利用

地球研では平成18年度末で最初の本研究プロジェクト5本が終了し、現在、新たに14本の本研究プロジェクトと3本のプレリサーチを推進しており、総勢1,200名を超える国内外の共同研究者が地球環境学に係わる総合研究に参画しています。地球研のプロジェクトが、「広い意味での人間文化としての地球環境問題を考える」という基本方針に沿って進められていることに照らし、国内外の共同研究者の専門分野は自然科学から人文社会系までの広い分野に及び、そのうち人文・社会系等の研究者が約4割を占めています。所属についても、国公立大学等や独立行政法人格を持つ研究所だけでなく、一般公的機関や民間研究機関等の専門家も含まれています。

### 2. 調査フィールドの共同利用

地球研の研究プロジェクトが調査対象地として選定したフィールドは、国内はもとよりアジアを中心にした各地に展開しその数は30地点を超えますが、それらの多くの地域では現地の共同研究者と地球研プロジェクトの研究者が継続的に調査研究にあたっています。

これら海外共同研究は、研究協定(MOA、MOU)を結ぶなどして共同研究の推進、研究資料の共有化、人的交流などを進めてきており、その相手先はオセアニアを除く世

界の全域にわたり、研究プロジェクトのコアメンバーとして外国人研究者15名を受け入れ共同研究を行っています。

### 3. 高精度分析機器の共同利用

地球環境問題の本質を理解するために有効なトレーサーを用いた方法として、安定同位体分析(産地や年代などの同定)、DNA分析(種や品種の詳細な決定など)があります。地球研ではこれらの分析を行うため、高精度を持つ最新鋭の設備を導入し、新たな分析法を開発し、それを広く研究者の利用に供することにより共同利用を促進しています。



クリーンルーム

国の環境政策——生態移民』(平成17年7月)、『シルクロードの水と緑はどこへ消えたか?』(平成18年3月)、『森はだれのものか?』(平成19年3月)を刊行しています。



地球研ニュース No.6



地球研ニュース No.7

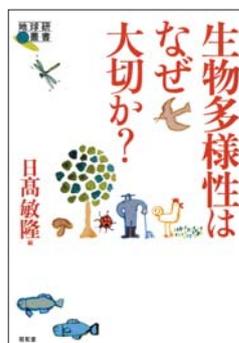
## 社会連携

### 1. ニュースレター『地球研ニュース』 (Humanity & Nature Newsletter)

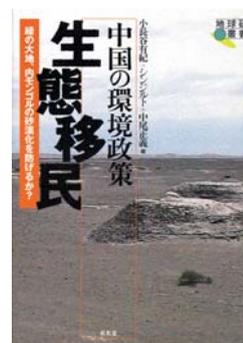
地球研とは何か、どんな活動をしているのかなど、最新の研究活動や時に応じた話題を研究者や社会に広く発信しています(A4版、12頁、3,000部発行)。年6回(隔月)の発行予定で、平成19年4月で第7号まで発行済みです。

### 2. 地球研叢書

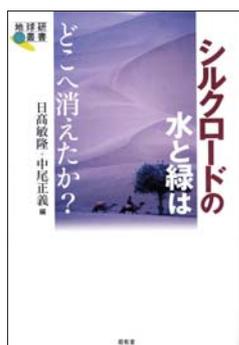
地球研の研究成果を学問的にわかりやすく紹介する出版物で、一般書店で販売されています。これまで開催した地球研フォーラムや国際シンポジウムの成果をもとにして、『生物多様性はなぜ大切か?』(平成17年4月)、『中



地球研叢書『生物多様性はなぜ大切か?』



地球研叢書『中国の環境政策 生態移民』



地球研叢書『シルクロードの水と緑はどこへ消えたか?』



地球研叢書『森はだれのものか?』

### 3. 地球研市民セミナー

地球研の研究活動などをわかりやすく紹介するため、地球研スタッフによる市民を対象にした公開講演会を平成16年11月から開催し、平成19年4月までに18回実施しています。平成19年度はさらに7回程度開催の予定です。



地球研市民セミナー

### 4. 地球研地域セミナー

地球研のある京都から全国各地に出かけ、自治体などとの共催で公開講演会を年1回開催しています。平成18年度は鹿児島市で「火山と人と食：鹿児島を語る！」をテーマにパネル形式によるセミナーを行いました。平成19年度は秋に静岡県伊東市で開催を予定しています。



地球研地域セミナー

## 大学院教育

地球研の研究教育職員は、人間文化研究機構に属する他の4機関と異なり、総合研究大学院大学の教員とはなっていません。しかし、大学院教育への一環として、さらには地球環境学の若手研究者を養成する観点からも、次の2つの事業を推進しています。

一つ目は、国立大学法人の3大学から大学院学生を特別共同利用研究員として受け入れ、研究指導を行っています(平成18年度の実績は4名)。とくに環境関連の分析科学や人類学、植物学、生態学、地理学、農学など、地球環境学に関連した分野をめざす大学院学生を今後とも積極的に受け入れていきます。

二つ目は、地球研の研究員として博士課程修了後の若手研究者をプロジェクト研究員として積極的に採用し、研究プロジェクトへ参画させることにより、地球環境学の研究活動の推進と研究者育成のための支援を行っています。平成19年4月現在、地球研では48名のプロジェクト研究員を受け入れています。



地球研「水の中庭」から



各機関の活動

# 国立民族学博物館

NATIONAL MUSEUM OF ETHNOLOGY



国立民族学博物館全景

## 概要

国立民族学博物館(民博)は、文化人類学・民族学に関する調査・研究を行い、その成果を通して、世界の諸民族の社会と文化に関する情報を人びとに提供し、諸民族についての認識と理解を深めることを目的としています。民博は大学共同利用機関(昭和49年法律第81号)として設置され、昭和52年(1977)には博物館を開館し、平成19年で開館30周年となります。

## 研究

### 研究活動

#### 機関研究

個人で行うのが難しい規模の大きな課題、周辺諸分野にまたがる学際的な課題、広く人文社会科学に共通する重要な基礎的課題について、本館の組織をあげて取り組む研究です。文化人類学・民族学の研究センターとしての民博の特性を活かし、学術的、社会的要請にこたえるために、分野横断的で先進的な課題を取り上げます。

現在、「社会と文化の多元性」「人類学的歴史認識」「文化人類学の社会的活用」「新しい人類科学の創造」の4領域の下に研究プロジェクトが組織されています。これらは、

文化人類学・民族学および関係諸分野の発展に寄与し、人文社会科学の再編や新しい分野の創出に貢献することが期待されます。

#### 共同研究

文化人類学・民族学および関連分野の特定のテーマについて、館内外の専門家が共同で行う研究です。館内外から研究課題を募り、館外委員を含めた共同利用委員会の審査で決定します。平成16年度から、「文化人類学・民族学および関連諸分野を含む幅広い研究」「本館の所蔵する資料に関する研究」「本館の機関研究に関連する研究」の3つのカテゴリーを設定しています。

平成18年度実施の課題数42件のうち、客員教員・特別客員教員を代表者とするもの、ならびに公募による館外の研究者を代表者とするものは、各10件です。共同研究員総数(館外)は、国立大学239名、公立大学29名、私立大学210名、民間機関など82名で、計560名です。

#### 各個研究

研究者個人が自由な発想に基づいて企画、立案し、実施する研究であり、人文社会科学の研究機関である民博の研究活動の重要な柱です。

### 研究組織

#### 民族社会研究部

世界の諸民族の社会に関し、民族動態、人類環境、社会システムについての調査研究を行います。



フィールドワーク  
(モンゴルにて)

## 民族文化研究部

世界の諸民族の文化に関し、認知表象、文化構造、民族技術・芸術についての調査研究を行います。

## 先端人類科学研究部

グローバル現象の調査・研究や理論研究を通して、先端的な人類科学に関する研究を行います。

## 研究戦略センター

文化人類学・民族学と周辺諸分野の最新の研究動向をふまえ、民博の研究活動の戦略を策定するために、平成16年度に設置されました。

## 文化資源研究センター

人間文化についての理解を深めるため、研究者による共同利用や、社会による利用が広く可能となるように、文化資源の体系的な管理と情報化、およびその共同利用や社会還元に向けて基礎研究や開発研究を行うとともに、事業推進の企画・調整を目的として、平成16年度に設置されました。

## 研究成果の公開

### 出版活動

民博の専任教員、客員教員・特別客員教員など館内外の研究者が、各個研究、共同研究、国際シンポジウム、科学研究費補助金などによる研究の成果を広く社会に公開するために、『国立民族学博物館研究報告』『Senri Ethnological Studies (SES)』『Senri Ethnological Reports (SER)』『国立民族学博物館研究年報』を出版しています。館外での商業出版も制度的に奨励しており、平成18年度は3点の刊行物が出版されました。

### 研究成果公開プログラム

研究成果を効果的に公開し社会還元を図る目的で実施しています。平成18年度は、国際シンポジウム「移民とともに変わる地域と国家」、公開シンポジウム「実践としての文化人類学 ― 国際開発協力と防災への応用」、研究フォーラム「口頭伝承と文字文化 ― 日本の民俗社会における知識と情報の伝承」など、あわせて8件の研究会を実施しました。



国際シンポジウム

## 共同利用

文化人類学・民族学を核とする諸分野の資料や情報を集積・整備して国内外研究者の共同利用に資するとともに、展示や各種事業などを通じて研究成果の社会還元を行っています。

民博所蔵の諸資料は、館内外における諸分野の研究や大学教育への活用、および他の博物館への貸し付けなどを通して、共同利用に供しています。

標本資料：256,875点、映像音響資料：69,348点、文献図書資料：図書596,454冊／雑誌16,033種、HRAF (Human Relations Area Files)：地域(民族集団)ファイル385ファイル／原典(テキスト)7,141冊。

平成18年度から「民族学資料共同利用窓口」を設置し、所蔵資料の利用に関する問い合わせに対応しています。

URL <http://www.minpaku.ac.jp/kyodomado.html>

### 1. みんぱく図書室

文献図書資料等の情報提供だけでなく、情報公開に積極的に取り組んでいます。国立情報学研究所 NACSIS-CAT への遡及入力や、CiNiiへの研究成果物コンテンツ入力を実施するとともに、新たに所蔵貴重図書展示会を企画し、平成18年度は「17・18世紀の博物誌」を開催しました。

また、日本の研究者たちが調査等で生成した各種資料を整理・データベース化して、民族学研究アーカイブズとして公開準備をしています。

## 2. データベース

マルチアーカイブズ検索システム(MARS)により、文化人類学・民族学に関わる膨大な資料や画像情報が館内外の研究者に広く利用されています。民博所蔵の各種コレクションや「ネパール写真データベース」をはじめ、服装関連の雑誌記事・日本語図書の索引、衣服標本画像、文献図書資料の総合目録データベース(OPAC)などをインターネットで一般公開しています。

## 3. 展示

### 地域展示

世界をオセアニア、アメリカ、ヨーロッパ、アフリカ、それに日本を含むアジア各地域に分けて展示しています。

### 通文化展示

特定の地域単位でなく、ジャンル別に世界の民族文化を通覧する展示で、現在は音楽と言語の展示があります。

### 企画展示

本館展示場において、現代的な問題や最先端の研究課題などについて、期間を限って開催します。平成18年度は東京外大A A研との共催による「臺灣資料展」などを開催しました。

平成19年度は、「世界を集める ― 研究者の選んだ民博コレクション」を予定しています。

### 特別展示

特定のテーマに関する最新の研究成果を総合的・体系的に紹介する大規模な展示で、特別展示館において、期間を限って年に数回開催されます。

・「聖地★巡礼 ― 自分探しの旅へ」

平成19年3月15日(木)～6月5日(火)

この特別展は、映像人類学の15年にわたる研究の成果を集大成したもので、聖地・巡礼をテーマに、サンチャゴ・デ・コンポステラ巡礼、恐山のいたこ、四国巡礼、聖地ルルドなどを撮影した膨大な映像資料を展示用に再編集し、関連する標本資料とともに展示します。

また、この特別展では、民博の30年間の映像製作の歴史を展示するほか、特別協力として参加している立命館

大学の映像アーカイブ研究の成果も併せて紹介します。

・「オセアニア大航海展 ― ヴァカ モアナ、海の人類大移動」

平成19年9月13日(木)～12月11日(火)

今から3,000年以上も前に、星や海のうねりを頼りにして、オセアニアの大海原に広がった偉大な遠洋航海者たち。それがポリネシア人の祖先です。東南アジアからイースター島まで、太平洋を東へと横切る地球規模の移動航海の様子を、カヌーや航海術、プラネタリウムなどを使って再現します。この展示はオークランド博物館(ニュージーランド)との共同企画によるものです。

その他にも、他の博物館、大学等との協力による巡回展示、共催展示を実施しています。



特別展示「聖地★巡礼 ― 自分探しの旅へ」

## 社会連携

### 1. 学術講演会

文化人類学・民族学を通じた異文化理解と、本館の学術研究機関としての役割を理解してもらうために先端的な研究活動の成果を社会に積極的に還元しています。

平成18年度は、公開講演会「多文化共生を考える ― オーストラリアの現場から」(H.19.3 東京)、「日本で暮らす ― 移民の知恵と活力」(H.19.3 大阪)を実施しました。

### 2. 国際連携

(JICA 集団研修 「博物館学集中コース」)

世界各地の博物館専門家を対象として、博物館の運営に必要な実践的技術の研修を実施し、各国文化の振興に貢献できる人材を育成しています。国際協力機構(JICA)の全面的委託のもとに、毎年、約10か国から10名の研修生を受け入れ、滋賀県立琵琶湖博物館と共同で4か月間の研修を運営しています。

### 3. 広報出版

『民博通信』『MINPAKU Anthropology Newsletter』『月刊みんぱく』『国立民族学博物館展示ガイド』、案内リーフレットや特別展の展示図録等を通して、研究や展示諸活動を広報しています。

### 4. みんぱくゼミナール

毎月第3土曜日に、一般社会人および学生を対象に、研究部の教員等による最新の研究成果に関する講演を実施しています。

### 5. みんぱく映画会

文化人類学・民族学に関する貴重な映像資料を、教員の解説を交えて上映しています。

平成18年度は、総合研究大学院大学の大学院生による作品上映会「新次元の映像」など計4回開催しました。

### 6. 研究公演

世界の諸民族の民族芸能などを紹介し、文化人類学・民族学への理解を深めてもらうことを目的としています。

平成18年度は、「ホワイトカカトゥー来日公演 オーストラリア・アーネムランドの音楽と美術」「天空のつばさ——南タイの伝統芸能ノーラー」など計4回の公演を行いました。

### 7. 学習キット「みんぱく」

学校機関や各種社会教育施設を対象に「みんぱく」を貸し出しています。「みんぱく」は世界諸地域の衣装や楽器、道具や学用品などをスーツケースにパックしたも

ので、9種類17パックが用意されています。

### 8. 「みんぱく e-news」

研究情報や各種事業のお知らせを、月1回程度電子メールで配信しています。

ホームページ <http://www.minpaku.ac.jp>

### 9. その他

「音楽の祭日 in みんぱく」を開催し、平成18年度は10のグループや個人によってさまざまな楽器による演奏がありました。

「先生のためのガイダンス」を行い、授業への利用促進を図る他、「子ども見学デー」「職場体験学習」の実施や「全国生涯学習フェスティバル」への参加を行っています。



研究公演「南タイの伝統芸能ノーラー」

## 大学院教育

民博には総合研究大学院大学の文化科学研究科（地域文化学専攻、比較文化学専攻）が設置されています。両専攻では、独創的な文化人類学・民族学の研究、長期のフィールドワークで得られた資料に基づく学位論文の作成、および広い視野を持った人間性豊かな研究者の養成をめざしています。

また特別共同利用研究員の制度を通して、国公私立大学の大学院生を受け入れ指導することで、他大学の大学院教育に協力しています。

# 資料

## 委員会一覧

### 経営協議会

◎石井 米雄	機構長
長野 泰彦	理事
朝岡 康二	理事
大崎 仁	理事
五味 文彦	理事
平川 南	国立歴史民俗博物館長
伊井 春樹	国文学研究資料館長
片倉 もとこ	国際日本文化研究センター所長
立本 成文	総合地球環境学研究所長
松園 万亀雄	国立民族学博物館長
岩男 壽美子	慶應義塾大学・名誉教授
大塚 和夫	東京外国語大学 アジア・アフリカ言語文化研究所長
大原 謙一郎	大原美術館・理事長
金田 章裕	京都大学大学院・教授
高村 直助	横浜市歴史博物館・館長
永井 多恵子	日本放送協会・副会長
平田 保雄	日経BP・代表取締役副社長
福原 義春	資生堂・名誉会長
藤井 宏昭	国際交流基金・顧問
古澤 巖	鳥取環境大学・学長

### 教育研究評議会

◎石井 米雄	機構長
長野 泰彦	理事
大崎 仁	理事
平川 南	国立歴史民俗博物館長
伊井 春樹	国文学研究資料館長
片倉 もとこ	国際日本文化研究センター所長
立本 成文	総合地球環境学研究所長
松園 万亀雄	国立民族学博物館長
小野 正敏	国立歴史民俗博物館・副館長
谷川 恵一	国文学研究資料館・複合領域研究系研究主幹
鈴木 貞美	国際日本文化研究センター・教授
中尾 正義	総合地球環境学研究所・プログラム主幹
關 雄二	国立民族学博物館・先端人類科学研究部長
青柳 正規	国立西洋美術館・館長
大塚 柳太郎	国立環境研究所・理事長
佐藤 宗諱	長浜バイオ大学・教授
須藤 健一	神戸大学大学院・教授

川北 稔	京都産業大学・教授
平野 由紀子	お茶の水女子大学大学院・教授
鷲田 清一	大阪大学・理事(副学長)

### 人間文化研究総合推進検討委員会

◎石井 米雄	機構長
長野 泰彦	理事
朝岡 康二	理事
大崎 仁	理事
五味 文彦	理事
安田 常雄	国立歴史民俗博物館・教授
谷川 恵一	国文学研究資料館・複合領域研究系研究主幹
小松 和彦	国際日本文化研究センター・教授
佐藤 洋一郎	総合地球環境学研究所・プログラム主幹
田村 克己	国立民族学博物館・副館長
川北 稔	京都産業大学・教授
金田 章裕	京都大学大学院・教授
五條堀 孝	国立遺伝学研究所・教授
齋藤 修	一橋大学・教授
佐倉 統	東京大学大学院・准教授
佐野 みどり	学習院大学・教授
中島 尚正	産業技術総合研究所・理事
平川 新	東北大学・教授
宮崎 恒二	東京外国語大学・理事(副学長)

### 評価委員会

◎石井 米雄	機構長
長野 泰彦	理事
朝岡 康二	理事
大崎 仁	理事
秋道 智彌	総合地球環境学研究所・副所長
辻田 政昭	事務局長
広瀬 和雄	国立歴史民俗博物館・教授
武井 協三	国文学研究資料館・文学形成研究系研究主幹
猪木 武徳	国際日本文化研究センター・教授
佐藤 洋一郎	総合地球環境学研究所・プログラム主幹
西尾 哲夫	国立民族学博物館・教授
岩男 壽美子	慶應義塾大学・名誉教授
川北 稔	京都産業大学・教授
金田 章裕	京都大学大学院・教授

外園 豊基	早稲田大学・教授
宮崎 恒二	東京外国語大学・理事(副学長)
山本 清	国立大学財務・経営センター・教授
鷲田 清一	大阪大学・理事(副学長)

### 機構会議

◎石井 米雄	機構長
長野 泰彦	理事
朝岡 康二	理事
大崎 仁	理事
五味 文彦	理事
平川 南	国立歴史民俗博物館長
伊井 春樹	国文学研究資料館長
片倉 もとこ	国際日本文化研究センター所長
立本 成文	総合地球環境学研究所長
松園 万亀雄	国立民族学博物館長

### 企画連携室会議

◎長野 泰彦	理事
篠原 徹	国立歴史民俗博物館・副館長
鈴木 淳	国文学研究資料館・副館長
合庭 惇	国際日本文化研究センター・情報管理施設長
秋道 智彌	総合地球環境学研究所・副所長
田村 克己	国立民族学博物館・副館長

### 連携研究委員会

◎長野 泰彦	理事
篠原 徹	国立歴史民俗博物館・副館長
井原 今朝雄	国立歴史民俗博物館・教授
陳 捷	国文学研究資料館・准教授
細川 周平	国際日本文化研究センター・プログラム主幹
早坂 忠裕	総合地球環境学研究所・教授
岸上 伸啓	国立民族学博物館・教授
大塚 柳太郎	国立環境研究所・理事長
村井 章介	東京大学大学院・教授
ツバタナ・クリステワ	国際基督教大学・教授
伊藤 亜人	琉球大学・教授
李 成市	早稲田大学・教授

### 研究資源共有化検討委員会

朝岡 康二	理事
安達 文夫	国立歴史民俗博物館・教授
古瀬 蔵	国文学研究資料館・教授
早川 聞多	国際日本文化研究センター・教授
関野 樹	総合地球環境学研究所・准教授
小林 繁樹	国立民族学博物館・情報管理施設長
合庭 惇	国際日本文化研究センター・情報管理施設長
◎及川 昭文	総合研究大学院大学附属図書館・館長
柴山 守	京都大学東南アジア研究所・教授
東倉 洋一	国立情報学研究所・副所長
橋田 浩一	産業技術総合研究所・副研究部門長
八村 広三郎	立命館大学・教授
洪 政国	日本アイ・ピー・エム株式会社 開発製造 ソフトウェア開発研究所 オートノミック・コンピューティング事業推進担当部長
牟田 昌平	国立公文書館・公文書専門官

### 地域研究推進委員会

◎石井 米雄	機構長
大崎 仁	理事
小野 元之	日本学術振興会・理事長
片倉 もとこ	国際日本文化研究センター所長
金田 章裕	京都大学大学院・教授
佐藤 慎一	東京大学大学院・教授
佐藤 次高	早稲田大学・教授
斯波 義信	東洋文庫・特別顧問
立本 成文	総合地球環境学研究所長
田村 和子	共同通信・客員論説委員
濱下 武志	龍谷大学・教授
平野 健一郎	早稲田大学・教授
松園 万亀雄	国立民族学博物館長
山田 辰雄	放送大学・教授
渡邊 幸治	日本国際交流センター・シニアフェロー

◎=議長・委員長

# 資料

## データ一覧

### 予算・決算

【平成19年度予算】

収入	14,965
運営費交付金	12,318
施設整備費補助金	2,430
自己収入	217
支出	14,965
教育研究経費	9,555
一般管理費	2,980
施設整備費	2,430

【平成18年度予算】

収入	14,856
運営費交付金	12,060
施設整備費補助金	2,608
自己収入	188
支出	14,856
教育研究経費	9,156
一般管理費	3,092
施設整備費	2,608

【平成18年度決算】

収入	15,134
運営費交付金	12,229
施設整備費補助金	2,608
自己収入	297
支出	14,606
教育研究経費	9,422
一般管理費	2,576
施設整備費	2,608

(単位:百万円)

### 職員数

(平成19年5月1日現在)

館長・所長 5

研究教育職員 193

事務・技術職員 202

機関名	職員(常勤)		外国人研究員	客員教員(国内)
	種別	現員		
機構本部	事務・技術職員	22		
	小計	22	0	5
国立歴史民俗博物館	館長	1		
	研究教育職員	50		
	事務・技術職員	41		
	小計	92	0	9
国文学研究資料館	館長	1		
	研究教育職員	33		
	事務・技術職員	34		
	小計	68	0	6
国際日本文化研究センター	所長	1		
	研究教育職員	28		
	事務・技術職員	36		
	小計	65	17	20
総合地球環境学研究所	所長	1		
	研究教育職員	29		
	事務・技術職員	24		
	小計	54	6	4
国立民族学博物館	館長	1		
	研究教育職員	53		
	事務・技術職員	45		
	小計	99	5	7
計	館長・所長	5		
	研究教育職員	193		
	事務・技術職員	202		
	計	400	28	51

(単位:人)

【非常勤研究員等】

(平成19年5月1日現在)

	国立歴史民俗博物館	国文学研究資料館	国際日本文化研究センター	総合地球環境学研究所	国立民族学博物館	計
機関研究員	4	3	4	2	5	18
リサーチアシスタント	0	13	0	6	12	31
プロジェクト研究員	0	1	2	59	1	63

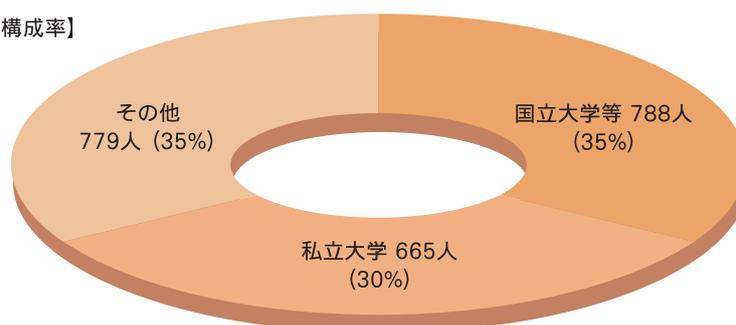
(単位:人)

共同研究の件数および共同研究者数 在籍 (平成18年度)

	共同研究 件数	総数	共同研究員の所属機関の内訳						
			国立大学等	公立大学	私立大学	公的機関	民間機関	外国機関	その他
国立歴史民俗博物館	29	290	79	8	101	16	1	21	64
国文学研究資料館	15	158	48	14	60	7	3	0	26
国際日本文化研究センター	15	372	103	28	167	33	19	0	22
総合地球環境学研究所	32	852	319	44	127	96	23	208	35
国立民族学博物館	42	560	239	29	210	21	30	0	31
計	133	2,232	788	123	665	173	76	229	178

(単位:件、人)

【共同研究者の構成率】



研究者の受け入れ・派遣 (平成18年度)

種別	国立歴史民俗博物館	国文学研究資料館	国際日本文化研究センター	総合地球環境学研究所	国立民族学博物館	計
外来研究員	12	5	16	16	50	99
日本学術振興会特別研究員	4	4	2	7	6	23
日本学術振興会外国人特別研究員	0	0	1	1	1	3
外国人研究員招へい	8	2	29	16	8	63
研究者の海外派遣	45	24	14	55	60	198

(単位:人)

## 外部資金の受け入れ

### 【科学研究費補助金(申請件数)】

機関名	平成19年度	平成18年度	平成17年度
国立歴史民俗博物館	59 (38)	52 (36)	42 (21)
国文学研究資料館	52 (29)	50 (29)	49 (27)
国際日本文化研究センター	16 (13)	19 (10)	26 (19)
総合地球環境学研究所	52 (35)	61 (36)	56 (39)
国立民族学博物館	35 (20)	41 (26)	43 (27)
計	214 (135)	223 (137)	216 (133)

(単位:件 カッコ内は新規分で内数)

### 【民間との共同研究】

機関名	受け入れ	平成18年度	平成17年度	平成16年度
国立歴史民俗博物館	件数	0	0	0
	金額	0	0	0
国文学研究資料館	件数	0	0	0
	金額	0	0	0
国際日本文化研究センター	件数	0	0	0
	金額	0	0	0
総合地球環境学研究所	件数	0	0	1
	金額	0	0	500
国立民族学博物館	件数	0	0	0
	金額	0	0	0
計	件数	0	0	1
	金額	0	0	500

(単位:件、千円)

### 【科学研究費補助金(採択)】

機関名	採択件数・金額	平成18年度	平成17年度	平成16年度
国立歴史民俗博物館	件数	32(14)	32(10)	29(9)
	金額	151,690	154,500	167,500
国文学研究資料館	件数	30(9)	36(14)	40(14)
	金額	92,100	141,100	179,200
国際日本文化研究センター	件数	11(3)	15(8)	13(7)
	金額	115,200	107,000	98,300
総合地球環境学研究所	件数	27(10)	33(14)	24(13)
	金額	121,410	93,100	65,100
国立民族学博物館	件数	25(10)	37(13)	35(10)
	金額	102,200	131,100	148,500
計	件数	125(46)	153(59)	141(53)
	金額	582,600	626,800	658,600

(単位:件、千円 カッコ内は新規分で内数)

### 【奨学寄附金】

機関名	受け入れ	平成18年度	平成17年度	平成16年度
国立歴史民俗博物館	件数	2	4	3
	金額	1,850	5,400	6,600
国文学研究資料館	件数	3	1	2
	金額	47,650	200	1,000
国際日本文化研究センター	件数	5	5	6
	金額	6,400	6,200	4,300
総合地球環境学研究所	件数	6	6	6
	金額	33,200	6,598	6,225
国立民族学博物館	件数	6	1	3
	金額	11,780	200	6,067
計	件数	22	17	20
	金額	100,880	18,598	24,192

(単位:件、千円)

### 【受託研究】

機関名	受け入れ	平成18年度	平成17年度	平成16年度
国立歴史民俗博物館	件数	1	1	0
	金額	1,455	637	0
国文学研究資料館	件数	0	0	0
	金額	0	0	0
国際日本文化研究センター	件数	5	2	2
	金額	35,183	30,495	17,446
総合地球環境学研究所	件数	9	11	10
	金額	84,681	85,018	89,747
国立民族学博物館	件数	3	6	6
	金額	16,400	22,184	23,985
計	件数	18	20	18
	金額	137,719	138,334	131,178

(単位:件、千円)

### 【その他の外部資金】

機関名	受け入れ	平成18年度	平成17年度	平成16年度
国立歴史民俗博物館	件数	1	0	0
	金額	2,501	0	0
国文学研究資料館	件数	1	3	3
	金額	960	2,635	3,272
国際日本文化研究センター	件数	0	1	1
	金額	0	5,018	20,137
総合地球環境学研究所	件数	0	1	0
	金額	0	3,500	0
国立民族学博物館	件数	1	1	0
	金額	8,000	7,000	0
計	件数	3	6	4
	金額	11,461	18,153	23,409

(単位:件、千円)

※間接経費含まず

## データベース一覧(平成18年度作成分)

### 【国立歴史民俗博物館】

分類	名称
データベースれきはく	中世制札
データベースれきはく	館蔵『懐溜諸肩』
データベースれきはく	日本民謡

### 【国文学研究資料館】

分類	名称
書誌・目録	和刻本漢籍総合データベース
本文データベース	連歌・演能・雅楽データベース
本文データベース	館蔵神社・寺院明細帳データベース
画像データベース	古典学統合百科データベース

### 【国際日本文化研究センター】

分類	名称
日文研所蔵 稀本・資料データベース	ちりめん本DB
日文研所蔵 稀本・資料データベース	近世風俗図絵DB
日文研所蔵 稀本・資料データベース	絵巻物DB
日文研所蔵 稀本・資料データベース	平治物語絵巻「六波羅合戦の巻」デジタル復元図
日文研所蔵 稀本・資料データベース	西洋医学史古典文献(野間文庫)
機関連携データベース	米国議会図書館所蔵浮世絵DB
機関連携データベース	奈良絵本

### 【国立民族学博物館】

分類	名称
原本・原資料	ネパール写真データベース(日本語版)
研究文献	服装関連外国語雑誌記事
所蔵資料目録	標本資料詳細情報データベース
原本・原資料	Nepal Photo Database (in English)
研究支援	音楽・芸能の映像データベース
所蔵資料目録	ビデオテープレコーダ情報データベース(仮称)
研究支援	「日本昔話:稲田浩二コレクション」データベース(仮称)
原本・原資料	梅棹忠夫写真コレクションデータベース(仮称)
原本・原資料	松尾コレクション絵葉書資料

## 大学院教育

### ●総合研究大学院大学

【学位授与状況】 (平成19年4月1日現在)

文化科学研究科	文学	42
	学術	38

(単位:人)

【在学生数】

(平成19年5月1日現在)

	研究科	専攻	入学定員	3年次(1年次)		4年次(2年次)			5年次(3年次)			計			
				女子	留学生	女子	留学生	女子	留学生	女子	留学生	女子	留学生		
後期3年博士課程	文化科学	地域文化学	6	3	1	1	3	2	0	9	5	0	15	8	1
		比較文化学	6	4	2	1	2	1	0	19	13	3	25	16	4
		国際日本研究	3	2	0	0	2	2	1	13	7	6	17	9	7
		日本歴史研究	3	4	3	0	9	2	0	18	4	0	31	9	0
		日本文学研究	3	3	0	1	2	0	1	9	5	0	14	5	2
	計	21	16	6	3	18	7	2	68	34	9	102	47	14	

(単位:人)

### ●特別共同利用研究員

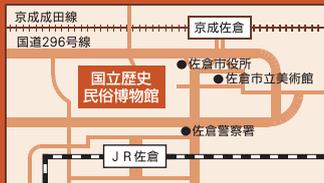
(平成19年5月1日現在)

国立歴史民俗博物館	国文学研究資料館	国際日本文化研究センター	総合地球環境学研究所	国立民族学博物館	計
4	9	3	1	16	33

(単位:人)

## 国立歴史民俗博物館

〒285-8502  
千葉県佐倉市城内町117  
TEL:043-486-0123 (代表)  
<http://www.rekihaku.ac.jp/>



## 国文学研究資料館

〒142-8585  
東京都品川区豊町1-16-10  
TEL:03-3785-7131 (代表)  
<http://www.nijl.ac.jp/>



## 国際日本文化研究センター

〒610-1192  
京都市西京区御陵大枝山町3-2  
TEL:075-335-2222 (代表)  
<http://www.nichibun.ac.jp/>



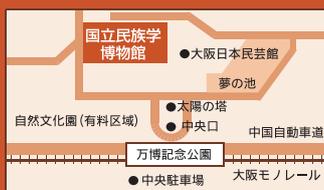
## 総合地球環境学研究所

〒603-8047  
京都市北区上賀茂本山457-4  
TEL:075-707-2100 (代表)  
<http://www.chikyu.ac.jp/>



## 国立民族学博物館

〒565-8511  
大阪府吹田市千里万博公園10-1 (万博記念公園内)  
TEL:06-6876-2151 (代表)  
<http://www.minpaku.ac.jp/>



## 大学共同利用機関法人 人間文化研究機構

〒105-0001  
東京都港区虎ノ門4-3-13 秀和神谷町ビル2階  
TEL:03-6402-9200 (代表)  
<http://www.nihu.jp/>

(最寄り駅)  
地下鉄日比谷線神谷町駅 (出口4b徒歩約2分)  
地下鉄三田線御成門駅 (出口A5徒歩約10分)

